

黄 砂 舞 う

豊田 文一

本年4月8日、朝まだき庭に出てみると、空は何だか黄色に曇り、おぼろ月夜のように太陽は中空にどよんでいた。翌日地方紙の報道によると黄砂襲来を伝えている。

私は、今でも夢うつつのうちに生死をかけた戦場を想起する。それは昭和12年、日支事変が勃発するとともに召集された。もちろん未教育補充兵として金沢市の野村にある山砲兵才9連隊に入営することとなる。軍隊経験は末くないが、即日見習医官の階級が与えられ、将校の末席につらなつた。肩章は金筋一本に星が3つ埋めこんであり、襟章は紫色、それに坐金の星がつけられている。ちなみに砲兵の襟章は黄色である。

営外の野村の道筋は人の波、営門まで送ってきた人々である。「万才、万才」という怒濤のような歓声である。約1週間位で動員完結、約1000名の山砲兵才109連隊が軍用列車で続々乗船地たる広島市宇品に向う。連隊は宇品―釜山―京城―奉天―山海關―天津と鉄道輸送、天津にて連隊集結、これより戦闘作戦、河北省の広野を斜に横ぎり、京漢線の臨城に進撃する。その間10数日は、綿畑で遮へいするものは殆んどなく、時々射撃をうけてこわくて歯の根がガチガチする。約2週間で内長城の九龍関に達する。天津からは子牙河（ツァーヤホー）に沿って行くと、河には射ち殺された支那兵が水ぶくれになって流れてくるのが数限りなかったことを思い出す。この九龍関は正太線（太原―石家荘）娘子関の南約60キロの所にある。11月始めて寒気きびし宿営すべき民家もなく、峠の中間で寒冷身にしみ、

一応の防寒具は支給されていたが、寒くて一睡もできない。山西省に入ると道路もなく河床道、私どもの部隊はこの渓谷の中腹の柵路を辿りながら、河床道を行く歩兵部隊などの授護を担当するわけである。この途中で大寨という地域を通る。この大寨は毛沢東語録にある「農は大寨に学べ」と食糧増産のキャッチフレーズにした所で、当時を偲ぶと切り立った渓谷で耕作などは考えられないが、戦后民衆が努力をおしまず、耕地を作りあげた新中国の食糧確保のモデル地区とされた。

約10日間残敵を掃討して、山西省の平地に進出し太原へ入城した。この南門には高々と「南京陥落」の横断幕がかかげられていた。私どもの部隊（山砲兵才109連隊才3大隊）は数日の休養后、北約60キロの忻県に駐留を命ぜられた。

さてこの忻県では、胃頭にかかげた黄砂現象が時々みられ討伐などで苦勞させられた。この黄砂は、おもに中国北部の黄土地帯で、細かな砂塵が風によって大氣中に空高く舞い上って広がり遠くまで及ぶ現象、このとき空は黄色、あるいは黄褐色となり、太陽は著しく生気を失ない視界が悪くなる。一般には、3月、5月に多い。これは、その時期に黄土地帯（中国西北部）の地面が草におおわれることなく、西あるいは北西の風が強いためである。これが上昇気流に乗って日本の上空に移動し、全国にみられることがあるが、地理的關係で当然西日本で経験されることが多い。4月8日の富山の空まで黄砂の舞うことはあったが、余り気にもとめていなかったせ

いで、今回の黄砂襲来で、かつての山西省に
駐留していた50数年前の記憶が蘇えり、ここ
に記述してみた。



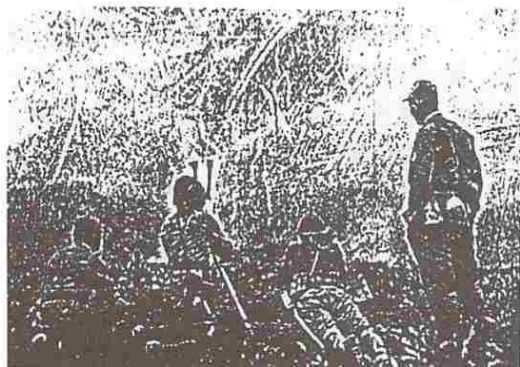
昭和13年1月
富山日報より
転写（山西省忻県にて）



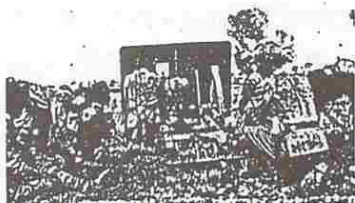
昭和13年
カメ風呂



昭和13年1月
防寒服
右旧制富山高校
佐野助教授（陸軍歩兵準尉）



山砲観測陣地
昭和12年



山砲射撃
昭和12年



地域住民の診療
昭和13年